
真・恋姫†無双　流れ着いた世界の中で

田中 田中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双　流れ着いた世界の中で

【著者名】

田中 田中

【あらすじ】

元々モバで書こうと思っていたんですがこっちになりました。

前奏。？

深い森の中、黒死くめの男が一人立っていた。

その男は裾が膝裏ほどまである外套を纏っていた。

男の顔は、男が外套についているフードを深く被っているため口元しか窺えない。

男の周りには人間の死体が転がっており、なかには切り殺されたものや獸か何かに引き裂かれたような死体もあった。

裕に百人は超えているだろう死体から未だとめどなく血が流れ出でいるため、辺りはまさに血の海となっていた。

男は先程からその場に立ち尽くしたまま何か思案していた。

またもや、か。僕にやめるひとができるか？

わからない。これで何度目だ？

とうとうは越えているだろうな。わかつていた。

いつなるべりい…

僕は変わらない。否、変われないのか…

わからない。本当に僕がわからない…

恐ろしいか？自分が、他者が、この時が…

恐ろしい？そんなことはないさ。ただ面倒なだけだ。

早く時が流れてくれはしないか。面倒だ。

男は消えた。その場から男は突然消え去った。

後にその場所には何もなかつたかのように風が吹いた。

その周りには犬や猫、鳥に熊に猪、果ては蛇やら熊猫やら何やらた

男は座り込み、木にもたれていた。

十数年前、外套を纏つた男が百ほどの人間を殺した場所に、時は流れ成長した筈なのに変わらぬ背中があつた。

時は流れ十数年後。

くさんの動物がいた。

動物達は一丸に心配そうな顔をしていた。

ああ、もう僕は終わりか…我ながら呆氣ないものだな…

やはり身体は人だつたか…いくら精神が人を逸脱していたとしても、人の身体が化学的な毒に勝てる筈ないか…

男は苦笑する。

自然のものには勝てるのにな。皮肉なもんだ。

しかし、この場所には縁があるな。

捨てられたのも此処。育ったのも此処。死ぬのも此処か…

男は右手で近くにいる猫の顎を撫でる。

まあ、いいだろ…

もう時間か…呆氣な…かつた…な…

男はそれから動くことはなかった。

男を囲んでいた動物達は骸に寄り添い、男と共に眠りについた。

前奏。？

……「う、此処は？」

周つを見ると何もないただ真つ白な部屋。

純白と言つていいほど白で彩らわれている部屋に、男は自分は場違
いかもしない、と思つた。

「おお、起きたか。」

何處からか声が聞こえた。その聲音から恐らく声の主は女性だらう。

「誰だ？ 何處に居る。」

姿の見えない相手に警戒しつつも辺りを見回す男。

「ううじやよ。」

男は後ろを振り返ると少し驚いたよつと声の主を見た。

声の主は妙齢の女性で、真っ白な服に身を包み、夜空のよつに蒼い髪を頭の後ろの高じところで束ね、翡翠色の双眸の持ち主だった。

「誰だ？そもそも僕は死んだ筈なのに…」

「儂は神じやよ。それと、おぬしは確かに死んだ。」

「神か…人の思考の中まで入って来るな。」

神といつ単語に多少なりとも驚きはしたが、全く顔色を変えないとなくそつ返す男。

心を読まれたことに關しては慣れているようすらに見える。

「それで？」

「ふん、食えんやつじや の。」

「まあいい。おぬしは毒で死んだ。これは確かじや。しかしな、おぬしの死は本来違つ死に方だつたんじやが…」

「僕の世界の人間じゃない何者かに毒を盛られ、殺された。そして、罪滅ぼとして僕の存在を違う世界に送り込み、あわよくば危険因子を排除させようとした、と。」

神の言おひとしたことをズハリと当てた男。

神は顔色を変えることはなかつたが、内心動搖していた。

「…何故わかつた？」

「かまをかけただけ。後は眼が語つていた。」

なるほど、と理解した神。生前の彼を観察していくことがあるため、彼がそういうことができると思い出した。

「なれば話は早い。その通りにしてくれんかの？」

「……了解した。」

「乗ってくれるか。正直助かる。」

「これは僕のためだ。ほかの誰のためじやない。」

男はそのままの場に座り込んだ。

「僕の身体は使い物にならんだら。転生するなら早くしてくれ。」

両手をやれやれ、といった調子で云がる男。

「全く、食えんやつじや。」

神は微笑しながら言った。

「転生するあたつて、いくつか言わなければならん」とがある。
「具体的には?」

「おぬしの行く世界の」とじや。三國志は知つていらぬ?」

「まあ、一応は。…僕が行く世界が三國の世界だつて言つたいつの?」

「あながちはずれではない。しかしな、おぬしが行くのは似て非なる外史といつもの。この世界は仲間になる将は大体同じと聞いている。」

しかしな、と続ける神。

「有名(ひきゆう)の將はあらかたおるが、いない將もある。しかし、その世界の中には存在しておるやうじや。」

「また、あらゆる時系列が歪んでおり、何が起(おこ)るか分からん。儂(わたくし)神でさえもな。」

「不確定、且つ予測不可か。」

「そんな感じじゃな。後はおぬしの能力のことじや。」

「能力か…どうなるんだ?」

自分の手を少しの間見つめた後そう聞き返す。

「やうじやな…生前の能力を引き継ぎ、更に強化。読み書きなどが

できるのみである。様々な抵抗の底上げへりこか。」

「毒やら向やらが効かないのか。」

「わうじや。しかし、致死毒に関しては2、3日寝込むかもしれませんな。」

「となると少しは効くのか。」

「まあな。ついでに言つておぐが、ほかのものは始めはないぞ。」

「何故?」

「赤子の時から読み書きや戦闘ができるのはあまりにも異端過ぎるので、三つを過ぎた辺りから徐々に解放するつもりじや。」

「それはありがたい。」

「気にするでない。もとは儂の失態じや。礼を言われる筋合いはないわ。」

「どうか、と返す男。

「さて…準備はいいかの？」

「準備も何もないだろ。荷物すら無いんだから。」

「それもやつりやな、と返す神。

「それでは、いくぞ。」

「承知。」

神の唇が言の葉を紡ぐ。

刹那、男の足元に蒼い炎が揺らめき始める。

辺りが光に包まる。

徐々に足のあたりから男の身体が光の粒子となつて消えていく。男は静かに目を閉じ、顔の前で手を合わせ、そのまま一礼した。

「行つて来る。母様。」

口元に笑みを浮かべつつ、どこか悲しそうに言った。

「氣づいておったか。」

そして、男の身体が完全に消えようとしたとき、神は涙を流しながらも笑い、彼に言つた。

「行つて来い。馬鹿息子。」

「必ず帰つてこい。」

光が消える。

男はいなくなつていた。

ありがとう、馬鹿息子。

その場に残つてゐるのは涙を流しながらすくまる神と、彼女の啜り泣く声だった。

前奏。？

「まだか…」

村の一角に佇む一軒の家の中で一人の若い男が右往左往している。

「もう…まだか、まだか。」

せわしなく動き続ける男に吉報が訪れた。

「旦那様つ！」

男のいる部屋に一人の少女が入つて來た。

「生まれたかつ！」

男は喜々として少女に問う。

「はーー早く奥様のもとへー。」

それを聞くより早く彼の妻のいる部屋へ向かった。

ガチャツ！

「華音ー。」

突然、部屋に入つて来た男に少し驚きはしたもの、すぐに笑みを浮かべ男を手招く。

「はあはあ、驕さん…生まれたわ。」

息も絶え絶えに男 駜に告げる妙齢の女性。

女性の名は華音といひしへ。

「ああ…よく頑張つてくれた…ありがとウ。」

そういつて驕は彼の妻 華音を抱きしめる。

「どういたしまして。」

微笑みながら言ひ華音。そして、視線を侍女の方へ向ける。

「私達の子供よ」

その侍女は先程、驍を呼びに言つた者だった。

「朔。」

「はい、奥様。」

朔は何かを腕に抱え、驍の前に行く。

「旦那様、元気な男の子ですよ。」

そう言つて驍に生まれたばかりの赤子を手渡す。

「おお……」

「お前が私の……いや、私達の息子か。」

驍は赤子に笑いかける。

「あつあつ。」

赤子は驍に手を伸ばし笑っていた。

「ねえ、驍さん。」

寝台に横たわりながら、顔を驍の方に向け呼びかける。

「「」の子の真名、考えた？」

この問い合わせに対し男はうるうたえるばかりだった。

「…すまん。」

頭を垂れる驍。

「そんなことだらうと思つたわ。」

驍は華音に呆れられ更に落ち込んだ。

「旦那様の名付ける才能は眞無ですかね。」

朔の口の一言にびじめを刺され驍は部屋の隅につまづくまつた。

「仕方ないわね。あなた、ふざけるのはそろそろ終わりよ。」

やつぶされたると驍は立ち上がり華音に赤子を手渡した。

華音は寝台から身体を起こし、赤子を抱いた。

それを見ると驍は寝台の側にある椅子に腰掛けた。

「すまん、華音、朔。」

それを言い終わり、朔が目で一人に、よひじこですか、と語りかけ
ると二人は真剣な面持ちになった。

「では奥様、この子の名を。」

「姓は丁、名は奉。」

「字は承淵、真名は霧瀧。」

「奉に承淵、霧瀧か…いい名だ。」

三人は微笑み視線を赤子 霧瀧に向ける。

「すうすう。」

そこには眠りに落ちた小さな身体があった。

「ふふつ。可愛いわ…」

優しく息子を撫でる華音。

「ああ、可愛いな…」

「本当に可愛いらしいですね。」

母の腕の中で眠る霧瀧の顔はとても安らかだった。

前奏。？（前書き）

5年後です

主人公視点
設定云々です

前奏。？

僕が生まれてからはや五年、色々なことがあった。

まずは僕の名前、姓を丁、名を奉、真名を霧濛といつ。

丁奉は字を承淵といつんだが、字は元服のとき授かるひじい。

補足すると、真名といつのはその者を表す神聖な名で、許可無く呼ぶと殺されても仕方ないといわれるくらい大切な名のひじい。

丁奉は三國志の呉の将で、史実だと孫權の時代の呉の当初では最強クラスの将だつた人だ。

また、彼はつぶての投擲技術は凄まじいものだつたそつだ。

一つ目は身体能力。

これは三歳のときに気づいたけど、生前に少し劣る程度だつた。三歳といつことは、今までを含めて考えると、あと一年もかからない

で生前を超えると思ひ。

母様（神）は三歳からひて言つたけど読み書きだけらしい。

ちなみに三歳から鍛練をするよつになつた。

父さんや母さんはすゞい驚いてたようだつた。

三つ田は僕の周り。

父さんはこの村の村長、母さんは孫堅様に仕えていて、いまは僕らを育てるためにこの村に戻つて来てる。

僕ら、といつのも半年程度前に妹が生まれたからだ。

妹の名は丁封、真名は魅瀧。

丁封は史実だと丁奉の弟である。

また、村といつよつかは町といつたほうが形容が正しいため、人や

物資が多いこの町は、何度か賊に襲撃されている。

だが、母さんを始めとした父さんの私兵に、たちまち賊は討伐、鎮圧、撃退されていた。

それで十年ほど前、賊との戦いで戦死した兵の娘を家で引き取り、侍女として今も丁家に仕えている姉貴分がいる。

彼女の名は陳武、字は子烈、真名は朔といつ。

陳武 朔姉さんは僕より十つ上で武に長けた人である。

史実の陳武は呂の精銳を率いていて、その隊は負け知らずの隊だつたそうだ。

朔姉さんと僕は元服したら孫堅様に仕えることになつてゐる。

といつても朔姉さんはあと数年で孫堅様に仕え始めるらしい。

朔姉さんは既に元服していて、丁封が五つになるまでといつ約束で家に残つてゐる。

あと、僕はこれから幼なじみと一緒に孫堅様のもとに三年ほど預けられる。

幼なじみの名は徐盛、真名を久遠といつ。

史実では曹操が攻めてきたときにつくつかの隊ともに孤立し、絶望にうちひしがれていた最中、敵軍に突撃し味方に勇気を与え、その状況を打破した勇将であった。

なんでも、孫堅様の娘の孫策様を筆頭としたお嬢様方に、同世代で異性の友達を作らせたり、男とともに遊びさせ男に慣れさせたりしようとしているらしい。

他にも家では書物がなく出来ない勉学や、実際の兵役を体験させるためだといつ。

そのため今は孫堅様が来るのを待つている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594n/>

真・恋姫†無双　流れ着いた世界の中で

2011年10月7日16時11分発行